



北日本支部（北海道支部の前身）について

日本農芸化学会では各地域における学会活動を盛んにするために、会員の希望により関西支部（1934年）、西日本支部（1936年）、北日本支部（1936年）、台湾支部（1936年）、満州支部（1937年）、東京支部（1937年）というように、次々と支部を設置した。今から50年前のことである。

札幌在住の会員有志が中心に発起人となり、北海道および樺太在住の会員多数の賛成を得て、昭和11年（1936年）7月4日北海道帝国大学農学部農芸化学教室において発起人会を開催し、支部名を日本農芸化学会北日本支部と定め、細則を作成、引き続き札幌在住会員の出席を求め、支部発会式および支部総会を開き、支部名、細則の原案の承認を得た上で役員を選任を行ったと記録されている。支部役員としては、支部長に三宅康次先生、幹事に伊藤光治先生、田町以信男先生が選任された。また、北日本支部の範囲は主として北海道、樺太と細則に規定されている。なお、北日本支部設置に関する本部の承認は、同年9月26日の常議員会でなされ、支部事務所は北海道帝国大学農学部農芸化学教室に置くとなっている。

北日本支部ではその後活発な活動が行われ、講読会は毎月のように開かれ、昭和15年3月までに34回にも及んでいる。講演会もその間8回開催されている。それ以降の支部活動も盛んであったが、昭和16年12月8日太平洋戦争に突入してからは回数も少なくなり、昭和18年から戦後の昭和22年までは記録が見つからない。これは戦中戦後のとくに混乱期に当る。驚いていることは、北日本支部が設立当時からその学会活動においてきわめてアクティブであったということである。

石塚喜明先生（名誉会員、北海道大学名誉教授）が日本農芸化学会北海道支部設立30周年記念特集（1978年）に次のように書いておられる。「この支部の出来た昭和11年頃は、農芸化学が目覚ましい発展の兆しを見せた時であり、ビタミンを中心とした研究等は世界の注目の的となったのであるが、反面農芸化学の研究分野もきわめ

て多岐にわたり、視野の狭い学者が育つことに対する心配の声もそろそろ出始めていたのである。」そのため、初代支部長の三宅先生は農芸化学科の先生のみでなく、広く各方面の先生に講演をお願いすることにされたそうである。

また、当時をふり返って石塚先生は、福山伍郎先生（林学科）のネマガリダケ（チシマザサ）の研究（はじめはパルプ原料として、後に制癌物質の抽出）、伊藤光治先生の酵素に関する研究、とくに酵素の構造と機能についての卓見、佐々木西二先生（終身会員、北海道大学名誉教授）のグループによる微生物の生理機能の応用を目指した研究、北海道立工業試験場における吉田武郎氏の除虫菊成分の化学的研究など、印象に残っているものが多いと話しておられる。

北日本支部の支部長は三宅先生、半沢 洵先生、高橋栄治先生と引き継がれたが、昭和18年から22年まではブランクで、昭和23年9月18日に日本農芸化学会北海道支部設立総会が北海道大学農学部において開かれ、中村幸彦先生が支部長に選任された。しかし、なぜか本部の承認は石塚先生が支部長になられた昭和25年4月であった。この時正式に北日本支部を北海道支部と改めると記録されている。

北海道における学会活動は、古くは札幌農学校が中心となって行われていたが、明治31年11月23日に札幌農学会（会頭 南鷹次郎）が発足した。札幌農学校が東北帝国大学農科大学となり、明治41年4月20日に札幌農林学会（会長 佐藤昌介）というように発展的に再発足し、北海道帝国大学農学部を経て北海道大学農学部と改称された現在まで、札幌農林学会は続いている。

北日本支部が設立される以前は、農芸化学の分野における研究の発表の場は主として札幌農林学会であった。支部が設立されてからも、はじめのころは札幌農林学会の一分科会として活動していたが、次第に支部は強化され、独立して活動するようになった。

（水谷純也）